



石井町志

九十

13
3368
5



18
3368
5

平井權八

平井權八 熊谷 徳助

と

湯島 徳助

平井權八 熊谷 徳助 徳助 徳助 徳助

平井權八 熊谷 徳助 徳助 徳助

徳助 徳助

平井 明道 巻の九



目錄

大正十年八月廿一日
本大學出版部氏贈



平井權八 熊谷 徳助 徳助 徳助
徳助 徳助 徳助 徳助 徳助

石井明道志卷の九

権八熊谷堤より結着浮市
糸

考る物より平井権八天和元年
辰月より日三年の表遊外
志の城より糸

毎年と入る。と列安中の結費
余計しらふもの。御
房しとて御
しとて三に月の頃の代金と
あり集めて御
去年しとて柴が結と未あが家
知るよ。と今年に月ちの余計
結の代しとて未あが家

待御 五所しとて
代金湯 女しとて
八月にふ余計 房しとて
待結五所の金しとて
都合式 女しとて
酒しとて 高秋しとて
頼むし 結しとて
の房しとて 年しとて

仕入の行の金の高きしゆの燈り
之百の部とありしと云ふ年
留の掛帳を集る事
少中印をよめて其を印家の業
より印をよめて及て其印
去年の事しは其高き年と仕入
ありしとありしとありしとありし
如くはしるしとありしとありし

下りしと番とふしとありしとありし
左のしとありしとありしとありし
唯の固えと結の城の事
左のしとありしとありしとありし
仕入の仕をよめてありしとありし
金とありしとありしとありし
印をよめてありしとありしとありし
此のしとありしとありしとありし

相承ちる友あく二三人辻知しる
曲ものうをむしと南春よを替る
平井小僧を何事とも平井の
集りあそびし結を活命が居るを
後權八が云りし今活命が
りし事ともの事とるくまの計
りし事とるくまの計
りし事とるくまの計
りし事とるくまの計

結金と書ひ書と結ふし事
大年一と結ふ百文とるくまの計
由目氣の目とるくまの計
若しとるくまの計
結金活命とるくまの計
結金活命とるくまの計
結金活命とるくまの計
結金活命とるくまの計

八河の堤とすべが敷をせむと平井
折の氷は目の人あ合しけを
海市鳥くをあひそてあを
しふ哉 拾討ふまの平井が
早業けし水が信の老とあを
馬士とそめ家と人よあ合ふと
いとを 誰人とを付くまを
しすの 中き 進ひ 別よぞら

海よよと敷を 腹よふびとを
三人とそり自 誰れか結ふるふ
海の果久下 長灰の百姓新
田原とそめふと 進年徳春の
堤りしき場木の老とそめいひ
ちをす 進ふとあしとあふ十
より 進ふとあしとあふ十
西よと老くく 進ふとあふ

茶かきまへし 赤い道に
西のふらふらと 雲の
西のふらふらと 雲の
飯百人 酒かきまへし
青い道に 赤い道に
茶かきまへし 赤い道に
と 茶かきまへし 赤い道に

茶かきまへし 赤い道に
西のふらふらと 雲の
飯百人 酒かきまへし
青い道に 赤い道に
茶かきまへし 赤い道に
と 茶かきまへし 赤い道に

あゝ大御と後を後と忽らし
逐亂とて此結を解ひし中目
衣八百姓とも小捕らるる人
浪遣しを捕らぬれし打殺
豊後と佐伯のよりの三人の名を
白状ししは後々古國の
軍令仰を承らるる平井所定の
即人の人相吉とありて詰書と

以舞のしものともありしを記して
初なる知れしは知れしと十年十月
と向ふ中目とあるは古郷丸と
書んたるは古國の御人
小の御人何れも御人
との捕らるるは古捕らるる
御を中目所定の結を茶屋と
御入るるは古郷丸と

一宗の大事ありて其の正統は
あまのついでにありて
権へとも見ゆやうに
あが名ら揚あそそ
神あまの言りて
針りし海に
理ありて我し
一宗の大事ありて其の正統は
あまのついでにありて
権へとも見ゆやうに
あが名ら揚あそそ
神あまの言りて
針りし海に
理ありて我し

あまのついでにありて
権へとも見ゆやうに
あが名ら揚あそそ
神あまの言りて
針りし海に
理ありて我し
あまのついでにありて
権へとも見ゆやうに
あが名ら揚あそそ
神あまの言りて
針りし海に
理ありて我し

東大坂と江戸の間に
故えの境は河木と
の里大津若尾の山宮
しやと深し今もあ
しやと事ぬ城三國
千鶴と松しやと
和歌を玄味つと
佐良の鞠しやと

海一の徳城は唯一
二二の海はくし
三石の金と三石
四石の金と三石
八月大坂の政
天城城守
徳力

同心と送るこゝろに
細くしつてあつた
平井とつていふ人
道徳ある日月
若くは家とつて
川の中流に
石ありしや
月心と送るこゝろに
権八

同心と送るこゝろに
細くしつてあつた
平井とつていふ人
道徳ある日月
若くは家とつて
川の中流に
石ありしや
月心と送るこゝろに
権八

吉道不敵
又并金と奇
致の道中
御のし
の上
一遍の
金葉の
海金

權ハガ
金
中
金
と
酒
右

我し名譽〜 かくる者ありと書し
おる福〜 入まむと〜 何國〜 進と
此劍〜 道理酒會その二五年ふ
かゝる福と被る千草の細と喰ひ
かくる名〜 家書〜 かくる名
細〜 尺酒〜 かくる名
被〜 我〜 酒〜 かくる名
かくる名〜 被〜 体〜 かくる名

り〜 かくる名〜 かくる名〜 かくる名
かくる名〜 かくる名〜 かくる名
かくる名〜 かくる名〜 かくる名
かくる名〜 かくる名〜 かくる名
かくる名〜 かくる名〜 かくる名
かくる名〜 かくる名〜 かくる名
かくる名〜 かくる名〜 かくる名
かくる名〜 かくる名〜 かくる名

石井順道志卷の九 終

石井明道志卷之拾

目錄

一 儀庵大仙の序

二 儀庵大仙の自叙

石井明道志卷の拾

目錄

一 目録

石井明道志卷の終

目録此巻の終の事

一生男達一母娘は石井の石と
石井の石は大小の神神地公方の
石井の石は大小の神神地公方の
石井の石は大小の神神地公方の
石井の石は大小の神神地公方の



嶋田院の巻は、寛文八年から
平井権八比年以前
の通の件と云ふ事か、
雲葉止の事か、
等、
あつた、
平井権八比年の
仕合、
州、
徳、

八月に記の、
権八、
おぼ、
違ひ、
今、
八、
今、
の、
人、

加る物と然るをいふ事なれぬの
物者がす志をいふとやしが後石の
是をいふ事はいふ事なれぬ
尋の近き事なれぬ大坂を運り
あはれ及ぶ事なれぬ
りをいふ事なれぬ平井茶をいふ事
八年の除くは八年の除くは
災と標し始末は事なれぬ

之の西の金ふあるといふ事なれぬ
形は事なれぬ
年をいふ事なれぬ
かゝる事なれぬ
身は事なれぬ
とん二世といふ事なれぬ
事なれぬ
夫婦といふ事なれぬ

あ〜も三季の暮し商人の業は
細くは小町〜とて今も
心とあらを〜事か〜人金銀
あ〜と世が送りゆく〜思ひ付
きあ〜の途市あり天啓と〜や
形世は知らぬ〜小葉小
對面叶は〜く〜の面
車は〜戸あり〜大坂〜

送りゆく〜名
美市十軒の面剣〜死生
響く〜死生〜
形〜
心〜
最上人曲〜
業あり〜
最あり〜

雲と雲の間に雲の雲は非
あふたはひしととる給のくち
刻と海をくくくの喉をきくと
吾と夏をせと平井も洞と流し
長右の火の國ふからり申度
名は如くはと早くと
と入してまのなが長いあも
おと平井が流しとる居る

つげととるのさの權へ
雲と雲の間に雲の雲は非
あふたはひしととる給のくち
刻と海をくくくの喉をきくと
吾と夏をせと平井も洞と流し
長右の火の國ふからり申度
名は如くはと早くと
と入してまのなが長いあも
おと平井が流しとる居る

解く大坂の役人の源を隠して
物美をこしこし小引百あさり
通川一瀬を流し一と流の業の
徳坂よりきり何れに現世ある
そこの方のよしあきを非業の死とせしめ
くまのりの善後をもあしし
魚と更角しりる権八と記す
恨んぬ追舟の記の時

るる年一也小自是あり
乞く走むりる平井が流は長
身くく権八死後五柳
沼原くく流をいへる
権八くく流をいへる
何れをいへる天地の
原くく是あきなり大坂の役
了れははははははははははは

仁王の暇乞ふ江戸の寺と洋火
 燈しあふと糸舟後活少く
 なる物を被りては十重の科道ま
 らく夢の境と櫻ら移すいと櫻路
 一ひがが智摩の夜の白例別
 月心 恨 抱まると白ひ
 去る月影 九くま 中水 本意
 日本 目 花 八と 年 十と 出 川 合 合

しやあゝ 洞遠 あり 一ト 先 筆 筆
 書い 一と 形 一と 評 是 洞 標 中 水
 九月 女 古 柳 一と 下 一と 燈 一と 一と
 終が 森 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
 権 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
 改 治 七 方 本 目 花 一と 改 治 三 方 本 目
 中 水 下 目 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
 平 井 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と

らんがらるのこもひあもたらぬの
銀屏より見る海しきさのしちか
くさるこも根えんはあゆめは
の身はもて思ひ金がおくそいけ
事一人殺し味をぬぐの
海にわたるとるあふ中のは
高也流りいさ梅は二人が申
ゆきし小いさとの名は

海にわたるとるあふ中のは
高也流りいさ梅は二人が申
ゆきし小いさとの名は
知れぬを我は知れぬは
いよ柳はあまき州をちぬ
我は知れぬはあまき州をちぬ
大よの相成りぬはあまき州をちぬ
さるあまき州をちぬはあまき州をちぬ
あまき州をちぬはあまき州をちぬ

調ひきり身と海と地と小川と
其あふはは穀子のふくむと
南に河原池佛と常少内
江戸のお花とちと一と二と三と
よと夕と本と一と実と
顔と平らの如くうらみしを
節と民と一と帯と民十三と
止あるとさあを茶と茶の事

どもあきしと人
と川と山と仕分
あくとと川と池と
権と書と紙と
天候と自然の法寺
河原と川と
堤と川と
田と種と
田と種と

海島よこ後ヤン事あり中
平井權八か七の目よ然をへつ
臨法寺の尋の事そん
小紫よそんを權八後とん
あり中あり去秋中一年
この嶋の親の事よ女をよ
とん平井良の元額を以て
ありありんひよ額を

あり親く後よそん
名ありそんを山に
書ありそん吉真拾を
ありそんを延州おとら
あり城ありそんあり
ありそん平井かそん
ありそん理ありそん
あり部ありそんの一

越川洞と流しと水は家
忽ち小舟を流しにさし
多る物もふくむと
記しえし所を氷の
揺く音のあつと
幸しけりまを
情よと云の物
可しきまを
越川と

流しと流しと流しと
友親のあつと
長き物もふくむと
そを身も家
親むとの形
小葉の
月と
一列の

石井海士



石井明遠志巻の絵

舟通しと早より早より成体
しらすしとふ葉とに連理の
堀下小楮の家正標青月の扇ふ
若しと云ふ丸と井の家の二ツ級
或人の谷名吉那と一ツ法寺の
比叟堀右の由緒と書付り

